きすふれ！　４

# きす☆ふれ　4

**EntsCat**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20707241**

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 本番無し, ♡喘ぎ, 最霊

無知シチュ師匠の総受けです。攻めたちが師匠を色々そそのかします。今回は本番無し、エク霊、モブ霊、ヨシ霊、最霊、♡喘ぎが有ります。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

# きす☆ふれ　4

「よお、邪魔するぜ」
夕方の相談所に、坊主頭の男が顔を出す。
「悪いな、忙しいのに個人的な相談で呼び出して」
「気にすんな。プライベートの時間をどう使うかは俺の勝手だ」
ヨシフの突き放したようで、優しい言葉に霊幻は困ったような笑みを浮かべる。この男は気を使いすぎる所があるな、と霊幻は思っていた。

「個人的な相談、とは何かね？新隆くん」

と、突然、ぐにゃあと空気が熱されたように歪んで、１人の青年をかたどった。
「来てたのか、最上さん」
迎え入れる霊幻とは対照的に、ヨシフは舌打ちした。
「俺の後をつけていい許可は出してない筈だが」
「ほう？そうだな、私も君たちの組織に、私の自由時間に干渉する許可は出してない筈だがね」
一際大きなヨシフの舌打ちが響いた。
「ヨシフ、今日は最上さんと仕事してたのか」
「……まあな」
「お疲れ様、最上さんお茶飲むよな？濃い目でいい？ヨシフも飲むか？」
立ち上がった霊幻と、入ってきた茂夫の目が合う。
「あ、師匠、お茶なら僕が……って、最上さん！？！？」
「やあ、久しいね」
「あーいい、いい。モブ来たばっかだろ？荷物置いて上着脱いでろ。それに……そろそろ食べなきゃと思ってた生菓子が……」
霊幻が給湯室に入っていってすぐ、エクボと茂夫はヨシフに詰め寄る。
「なんで最上がここに出入りしてるんだよ！！」

しかも、霊幻とは初対面では無い親しさを滲ませている。そうイラだたしげにエクボは問うた。
「詳しくは言えないが、政府は最上と取り引きをして……」
「成仏させようと政府の霊能部隊にしつこく追い回されてなあ。適当にあしらっていたら、被害者の多さに政府が泣きついてきたのだよ。丁重に扱うから暴れないでくれ、とな。……私の目的は世直しだ。真面目に働いている人間をいたぶるのはそもそも本意ではない。だから私に何でも情報を渡す代わりに、ある程度政府の困りごとを引き受けてやることにしたのだ。……それが世を正す１つの手段でもあるしな」
「勝手にベラベラと……」
「貴様らに私の言動を縛る権利は無い」
その通りなのだろう。ヨシフが黙り込んだ。
「で、何で霊幻の野郎と知り合った」
「キミたちには関係ないだろう」
「無知で無力で無防備な同僚がテメェみたいなヤバい霊と話すのがどれだけ不味いか、テメェが分からないわけがないだろ」
エクボの言葉に茂夫の顔がだんだん青くなる。
「まあ、その通りだ。なんて事はない、政府がとある除霊をしたがったが、その土地の持ち主が性格の悪い偏屈老人でね。たまたま新隆くんのマッサー……えっと、なんだったかな、じゅじゅつ……」
「いやもうマッサージでいいから」
「そのマッサージの常連だったのだよ。で、新隆くんが話を通して調伏をしたのだが……いや驚いたよ、新隆くんはびっくりするほど余計な事をする足手纏いで……キミたちはどうやってフォローしてたんだ？」
「……まあ、慣れてるんで」
「新隆くんの面倒を見る手間がかかり過ぎて、いっそ見捨ててやろうかと思った時に……彼が、大怪我をすることを理解した上で、野次馬に来ていた地主を助けたのだよ」
「「「……」」」
「まあおそらく悪党であろう、新隆くんにセクハラしまくっていた

その醜悪な老爺をだな」
「おいちょっと待てソイツの名前教えろ」
「仕事上の守秘義務に抵触することはちょっと……」
「あっコイツ都合のいい時だけ」
「善人を助けるヤツはいくらでもいる。だが……自分に害を成してきた人間を命懸けで助ける者は、私は、見たことが無かった。とてもくすぐったい気持ちになったよ。偽善者め、と罵りたい気持ちと、崇め奉りたい気持ちがないまぜになった、不思議な感覚だ」
最上はうっとりと胸を抑える。
「それに新隆くんは私を畏れはしても、怖がらなかった。何度も仕事を共にし、たまに溢れる彼の気高さを求めるようになった私は認めざるを得なかった──生き死んで初めて、誰かに惹かれていると！」
エクボが顔を歪めた。
「……それから私は新隆くんに嫌われないように振る舞った。だから私は新隆くんに嫌われていない。それだけのことだよ」
「『名前』は」
硬いエクボの声が響く。
「苗字はともかく、死者は生者から許可されない限り、名前を呼ぶ事はできないはずだ。──霊幻は、何を対価に求めたんだ？」
最上は不自然なほど目を細めて笑う。そうすると悪霊化しているかどうか分かりにくくなるからだ。
「『良かったらたまに仕事を手伝って欲しい』と言われたから、『いつでもキミが呼んだら来てあげよう。その代わりに下の名前で呼んでもいいか？』と訊いただけだ。フェアな取り引きだよ」
「あの馬鹿……！」
吐き捨てたエクボに茂夫は驚く。
「な、何かまずかった？」
「アイツがやらかしたのは最上との使役契約だ！いつでも最上を呼び出せる代わりに……名前を教えてしまったんだよ！日本じゃ名前は本人そのもの、魂そのものだ！霊幻は最上に魂を差し出したんだ！」
「そ、んな」

「こらこら、言っただろう、私は新隆くんに嫌われたくは無い、と。ただ私は新隆くんの名前を呼びたかっただけだ。それに、私の知らないところで死なれたら悲しいから、いつでも呼んでもらっていい、と許可しただけだ。危なっかしいからな、新隆くんは。……まあ、ちょっと不便だがな」
「なんだ、そうなんですね」
「いや、破格の契約だろ……信じらんねえ……」
ほっとする茂夫に対して、エクボは頭を抱えた。
「アイツ、悪霊に対しての危機感無さ過ぎだろ……」
「そうだな、誰かさんのおかげでな。ここは非常に居心地がいい。……まあ、危機感の無さは、私も頭が痛い問題ではあるが」
霊幻が給湯室から戻ってくる足音がして、一旦一同が黙る。
湯呑みに手を伸ばそうとして──最上が眉を顰めた。
「新隆くん、そのハンコには触るな」
無造作に机に並べた依頼の品を片付けようとした霊幻を、最上が止めた。
「キミね、依頼品は全部霊視しろと言っただろ？」
「いやだって芹沢が大丈夫って言ってたし……」
「いいから、狐の窓で視てみろ」
霊幻は渋々指を絡め、組み合わせる。
「零（・）能力者が視た所で……」
「『最上啓示の名において、姿あらはせ隣の世』」
「！？！？」
息を呑んだエクボと違う理由で、霊幻もまた息を呑む。
「え……何だ、コレ……」
霊幻が指の窓から覗いたハンコには、黒いスライムがベッタリとくっ付いていた。
「発動前の呪いだよ。ちゃんと霊視しないと視えない。私が解呪するから、それ以上触らないことだ。まったく、キミは目を離すとこれだから……」
「霊幻ッ！お前大丈夫か！？」
「えっ何だよ！？」
「最上の『名前』を使ったりして……胸が苦しくなったりしてねえ

か！？！？」
「大丈夫だ。私自身が許可しているから、新隆くんには何の影響も無い」
「霊幻……おまえ、後で説教な」
本格的に頭痛がしてきたエクボの低い声に、「なんで！？」と霊幻が叫んだ。

※

「で？ヨシフに相談とは何かね」
「う……その……」
「新隆くん、私はキミを心配しているのだよ。私が力になれないことなんて先ず無いと思うが」
霊幻は少し、迷って。
「その……射精が上手く出来なくて……」
口にしてから、かぁっと顔を赤くした。
「なんだ、回春か。任せたまえ、生前はよくやっていたよ」
が、霊幻の予想に反してサラっと最上は返した。
「かいしゅ……？」
「回春、かいしゅん、だ。要はインポテンツの治療だよ。昔は西洋医学ではどうしようも無かったからね、漢方や呪術師、霊能力者がもっぱら請け負っていた。キミの所にも依頼が来た事があるはずだが？」
「……ウチは子供が出入りしてるから……」
目を逸らす霊幻に最上は肩をすくめる。
「今後は積極的に受けたまえ。回春を依頼してくるのは金持ちの老人ばかりだ。安全なボロい仕事だよ」
「……考えとく」
「では、問題無ければ始めようか？メモの準備はいいかね」
霊幻は頷いて手帳を取り出した。
「まず、食生活の改善からだ。亜鉛を意識的に摂りなさい。インスタント食品を摂らずに、納豆を食べるといい。まあ、亜鉛が多い食べ物なら何でもいいが、納豆が一人暮らしの新隆くんには１番取り

入れやすいだろう」
「分かった」
「風呂上がりに股関節の柔軟をするように。身体が硬いと性行に支障が出る。自慰で関節を違えることもある。血流の巡りも悪くなる。……何、５分でいいんだ」
「うん」
「運動をして体力をつけなさい。時間がないだろうから、最初はトレーナーについてもらって短時間で効率的な筋トレをするといい。案外絶頂するまでの体力が無いことも多いもんだ」
「ふむふむ」
「……一般論じゃねーかよ！！」
エクボが思わずツッコんだ。
「意外と効果的なものだよ。さて、ちょっとした問診と検査をしたいんだが……苦痛を伴うんだが、いいかね？」
霊幻の顔が少し緊張に白くなる。
「……お願いします」
ゆっくりと最上は頷いた。
「！？新隆くん！？！？服は脱がなくていい！……あ、いや、下は脱いで貰おうか」
「施術室でいいか？」
「どこでも構わんが、リラックスできる場所でな」
一同は施術室へ移動した。
緊張した面持ちで、最上の一挙手一投足を見守る。
「新隆くん、射精できないと言っていたが具体的に出来ないのは勃起か？それとも射精そのものか？」
「勃起はできる。……射精ができない」
「ふむ、射精障害か……これまでに試した方法は？」
「自慰方法の見直しと、前立腺マッサージ」
「前立腺マッサージは勃起障害の方だな……」
「でも、それで一回は射精できたんだよ。でも家でやってみたら、イけるけど出なくって」
「うーん……膀胱へ逆流したか？それともドライオーガズムか……機能を見るために一回、強制的に射精させる。痛いぞ、耐えたま

え」
霊幻は息を呑んで、しっかりと頷いた。
「──いくぞ」
ぐ、と歯を食いしばった霊幻は。
「ひっ……！？あああぁあッ♡♡♡♡」
予期せぬ快感に悲鳴を上げた。
「精巣には問題は無さそうだな……だとすると……筋肉のどれかか……？膀胱頸部が怪しいが……」
「やぁっ……♡はぅウンッ♡♡♡」
最上が霊力を使って身体を探るたびに、我慢できない絶頂感が霊幻の全身を駆け巡る。
「……集中してるんだ。痛いのは分かるが、ちょっと声を抑えて貰えないか？いい大人なんだから」
「わ、分かっ……んんんんんッ♡♡♡♡」
霊幻は慌てて口を手で塞いだが、甘やかな唸りは押し殺せ無かった。
「前立腺……精管……うん、関連した筋肉はちゃんと動いてるな」
「んっ♡んっ♡んんん……っ♡」
「ビクビク震えないでくれ、探り辛い」
そんな事言ったって、と恨めしげに霊幻は最上を睨んだつもりだったが、潤んだ瞳では誘っているようになってしまっていた。
「……っ、出るぞ。しっかり受け止めなさい」
「！？あ、アァ……ッ！」
霊幻は慌てて口から手を離したが間に合わない。
無防備に放り出された性器からびゅるびゅると白濁が溢れた。
「はっ……♡う、っ……♡」
「よしよし、良く耐えたね。えらいぞ。ふむ……精液の質はともかく、射精機能そのものに問題は無さそうだ。となると、ネックになっているのは精神面かな……そこも探ってもいいが、かなりの苦痛を伴うからな……性的なトラウマとか、心当たりはないかね？」
「……パッとは、思い出せないな」
霊幻は首を捻る。
ふむ、と最上は腕組みをして唸って。

「そもそも新隆くん、キミ、性欲は有るのかね？」

「……無い、かも」

ギャラリーの目が、丸くなった。

続